



Title	現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(2)
Author(s)	出口, 厚実
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 71(1-3), p. 1-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81089
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

現代スペイン語における語順タイプの 多様性とその頻度（2）

出口 厚実

Orden de los elementos funcionales de la oración: Sus variedades y frecuencias

Atsumi DEGUCHI

En este artículo vamos a añadir algunos datos complementarios a nuestros intentos anteriores de análisis estadísticos (Deguchi 1983, 1985a, 1985b) que se realizaron sobre diversos aspectos del orden de los elementos funcionales del español contemporáneo.

Ponemos de manifiesto en la primera parte diferencias de las frecuencias de intervalo con que reaparece un determinado tipo del orden de palabras a través del corpus completo, o sea se calculan frecuencias interoracionales a propósito de la secuencia SV/VS, tematización de los objetos directo, indirecto y complemento circunstancial.

En la segunda parte están calculadas la distribución y frecuencias de los tipos del orden de elementos oracionales en función de la presencia o ausencia de un complemento adverbial. También se evalúan los resultados obtenidos del cómputo del número de complementos adverbiales que una oración incluye, comparado con la posición que cada uno ocupa dentro de ella.

0.

拙稿（1983, 1985a, 1985b）で現代スペイン語の主要構成要素間に見られる語順の諸相を量的に分析しようと試みて来た。以下の各統計も同じ corpus に基いており、前稿を補足しスペイン語統語論における語順の多様性を探る足掛りとしたい。

1. 連文的頻度

語順や語順に関連する統語事実の多くは各々の文ごとに独立した現象ではないと考えられる。そこで、これらのうち若干について文連鎖の隣接要素及び同一単位の生起までの距離など、並列的關係を考察して見よう。言わば「横とのつながり」において捉えられる出現度数なので連文（あるいは連節）的頻度と名づけることにする。本節が扱う順序は、従って、文要素の文中順位ではなく、文を越えたテキスト（全資料体）における一定の統語的特性の分布と配列に係わるものである。

1. 1. VS/SV の継起

文内での主語・動詞の相対的順位の頻度及び他の統語的条件との関連については既に出口（1985a：pp. 3—9, 1985b：pp. 10—12）で示した。ここでは VS 語順と SV 語順がテキスト中でどのように連続して、あるいは離れて出現するのか、その連文的頻度を調べる。表（1）はこの 2 タイプの語順が再出するまでの文（節）数を数えそれぞれの度数を記録したものである。文間隔が 1 というのは直後に同じ VS または SV 順序の節が続く場合で、間隔 2 は一つの文を間に置いて同語順タイプが出現することを意味する。なお有主語文のみを取出してそれらを並列したと仮定した場合の文連鎖について計算がなされていて、無主語文は含まれていない。

(1)

文間隔	VS	SV	計	文間隔	VS	SV	計
1	42	441	483	11	3	0	3
2	27	99	126	12	3	0	3
3	24	27	51	13	1	0	1
4	22	3	25	14	2	0	2
5	16	0	16	16	1	0	1
6	10	2	12	19	1	0	1
7	5	0	5	24	1	0	1
8	4	0	4	26	1	0	1
9	6	0	6				
10	3	0	3	合計	172	572	744

有主語文全体で SV, VS 順の文はそれぞれ 76.9%, 23.1% で、およそ 3 : 1 の割合であったが (cf. 出口 1985a : p. 4), この総頻度を反映して両タイプの継起的出現には大きな差異が認められる。VS 語順の最大間隔は 26 で 1 事例のみ発見されたが、裏返せば、SV 語順の文が 25 文連続する個所がテキスト中に存在したことになる。また、SV 型では間隔 1 が 441 例（全体の 77.1%）観察されている。

る。これは逆に VS 語順の文が 2 連続するケースが 4 分の 1 以下であることを示す。しかし、VS 型がもし平均的に分散して生起すると仮定すれば文間隔はほぼ 3 に近くなるはずであるが、表(1)の示す最頻度値は 1 であり、また間隔 2 も次いで高頻度である。この事実は VS 語順が 1 度現われると連続または接近して起こりやすく、また極端に長く不生起が続くことも多いことを示唆する。

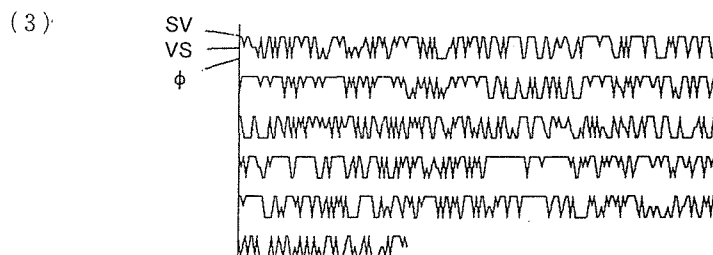
次に、連続する 2 文における無主語／VS／SV 文の連関を調査した結果、(2) が得られた。この表は x 軸の文タイプの直後に続く y 軸の文型の度数とその百分比を集計したものである。

(2)

$i + 1 \setminus i$	無主語	VS	SV	合計
無主語	122 (37.2%)	49 (28.5%)	157 (27.4%)	328 (30.6%)
VS	49 (14.9)	27 (15.7)	96 (16.8)	172 (16.0)
SV	157 (47.9)	96 (55.8)	319 (55.8)	572 (53.4)
合 計	328	172	572	1,072

上のデータから読みとれるのは、無主語文は VS、SV の文に比べ、後に無主語文を従える比率が高く、反対に無主語の後に SV が後続するケースがやや少ない傾向が存在するという点である。一方、主語主題化の有無は後続文の 3 類型比に差異をもたらししていないようである。

これら 3 タイプの推移を線グラフ化したのが次図 (3) である。垂直座標上の上・中・下段がそれぞれ SV、VS、無主語を表わす。



1. 2. DO, IO, AC 主題化の距離

主語以外の語順要素のうち主題化が相対的に高率な (cf. 出口1985b: §2. 1) 直接目的語・間接目的語・副詞句について、一つの主題化ケースから次の主題化までにどれだけの間隔があるかその文数を数えることにより比較して見た。この統計ではそれぞれ該当の文法関係成分を含む文のみを抽出し、主題化／非主題化の連文的頻度を考察している。例えば (4 A) の DO の場合、直接目的語を含む総文数436の連続を仮想した上での 2 つの主題化文間の距離を示す。百分比はその間隔頻度が全体に占める割合と、以下の間隔との累積比率である。その平均距離6.49は DO の主題化が平均して 6 文から 7 文毎に起ることを示している。

（４）A. 直接目的語

文間隔	頻度	比率	累積比率
1	9	13.4%	13.4%
2	10	14.9	28.4
3	8	11.9	40.3
4	3	4.5	44.8
5	7	10.4	55.2
6	4	6.0	61.2
7	3	4.5	65.7
8	3	4.5	70.1
9	1	1.5	71.6
10	2	3.0	74.6
11	6	9.0	83.6
12	3	4.5	88.1
13	2	3.0	91.0
14	1	1.5	92.5
15	1	1.5	94.0
16	2	3.0	97.0
17	1	1.5	98.5
31	1	1.5	100.0
合計	67		

平均間隔 6.49
標準偏差 5.41

B. 間接目的語

文間隔	頻度	比率	累積比率
1	4	30.8%	30.8%
3	4	30.8	61.5
4	1	7.7	69.2
5	2	15.4	84.6
9	1	7.7	92.3
11	1	7.7	100.0
合計	10		

平均間隔 3.85
標準偏差 2.98

C. 副詞句

文間隔	頻度	比率	累積比率
1	166	51.4%	51.4
2	68	21.1	72.4
3	40	12.4	84.8
4	20	6.2	91.0
5	16	5.0	96.0
6	7	2.2	98.1
7	3	0.9	99.1
8	1	0.3	99.4
9	1	0.3	99.7
14	1	0.3	100.0
合計	323		

平均間隔 2.09
標準偏差 1.62

1. 3. 節タイプの継起

これまでのいくつかの集計で、語順の変異に係わる要因として節の種類に注目し、節種別（cf. 出口1985a：pp. 1—2）の下位数値を比較した。8種類の節タイプの通算頻度は既に拙稿（1983：pp. 57, cuadro 3）で与えられているが、ここでは corpus の文連鎖の中で各節種毎に直後及び直前にどのような節が現われるかの細別を調べた。表（５）では x 軸の節に y 軸の節が後続する頻度が数えられている。また y 軸を中心に横に見れば各節にそれぞれ先行する節種の頻度を比較することができる。

(5)

後\前	独立断定	疑問	命令	間接疑問	補文	連体	関係	副詞	計
独立断定	310	5	7	9	62	6	125	63	587
疑問	4	3	0	0	3	0	3	1	14
命令	5	0	4	1	1	0	3	2	16
間接命令	13	0	0	0	0	0	0	0	13
補文	76	1	3	1	10	0	15	9	115
連体	4	0	0	0	2	1	1	1	9
関係	116	4	2	2	21	1	44	22	212
副詞	59	1	0	0	16	1	20	9	106
合計	587	14	16	13	115	9	211	107	1072

独立断定節を例にとれば、縦方向に310, 4, 5, 13, 76, 4, 116, 59の数字は各y軸に示される節タイプの文が後続するケースの度数を表わし、横方向の数列310, 5, 7, 9, 62, 6, 125, 63はx軸の節種が先行する事例を数え上げたものである。

次に上表の絶対数を比率化した表を掲げる。(6) Aはある節種の直後に出現する節種のパーセンテージを示す。下段の百分比は全体で平均として予想される比率との差である。同様に節種の直前に現われるタイプとの関係を明らかにしたのが(6) Bで、この表では縦方向にそれぞれ先行する節の相対的頻度を記す。

(6) A. 後続節タイプの比率

i + 1 \ i	独立断定	疑問	命令	間接疑問	補文	連体	関係	副詞	計
独立断定	52.8	35.7	43.8	69.2	53.9	66.7	59.2	58.9	54.8
	- 1.9	-19.0	-11.0	+14.5	- 0.8	+11.9	+ 4.5	+ 4.1	
疑問	0.7	21.4	0.0	0.0	2.6	0.0	1.4	0.9	1.3
	- 0.6	+20.1	- 1.3	- 1.3	+ 1.3	- 1.3	+ 0.1	- 0.4	
命令	0.9	0.0	25.0	7.7	0.9	0.0	1.4	1.9	1.5
	- 0.6	- 1.5	+23.5	+ 6.2	- 0.6	- 1.5	- 0.1	+ 0.4	
間接疑問	2.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.2
	+ 1.0	- 1.2	- 1.2	- 1.2	- 1.2	- 1.2	- 1.2	- 1.2	
補文	12.9	7.1	18.8	7.7	8.7	0.0	7.1	8.4	10.7
	+ 2.2	- 3.6	+ 8.0	- 3.0	- 2.0	-10.7	- 3.6	- 2.3	
連体	0.7	0.0	0.0	0.0	1.7	11.1	0.5	0.9	0.8
	- 0.2	- 0.8	- 0.8	- 0.8	+ 0.9	+10.3	- 0.4	+ 0.1	
関係	19.8	28.6	12.5	15.4	18.3	11.1	20.9	20.6	19.8
	0	+ 8.8	- 4.4	- 7.3	- 1.5	- 8.7	+ 1.1	+ 0.8	
副詞	10.1	7.1	0.0	0.0	13.9	11.1	9.5	8.4	9.9
	+ 0.2	- 2.7	- 9.9	- 9.9	+ 4.0	+ 1.2	- 0.4	- 1.5	

B. 先行節タイプの比率

	独立断定	疑問	命令	間接疑問	補文	連体	関係	副詞	計
独立断定	52.8	28.6	31.3	100.0	66.1	44.4	54.7	55.7	54.8
	- 1.9	-26.2	-23.5	+45.2	+11.3	-10.3	- 0.0	+ 0.9	
疑問	0.9	21.4	0.0	0.0	0.9	0.0	1.9	0.9	1.3
	- 0.5	+20.1	- 1.3	- 1.3	- 0.4	- 1.3	+ 0.6	- 0.4	
命令	1.2	0.0	25.0	0.0	2.6	0.0	0.9	0.0	1.5
	- 0.3	- 1.5	+23.5	- 1.5	+ 1.1	- 1.5	- 0.5	- 1.5	
間接疑問	1.5	0.0	6.3	0.0	0.9	0.0	0.9	0.0	1.2
	+ 0.3	- 1.2	+ 5.3	- 1.2	- 0.3	- 1.2	- 0.3	- 1.2	
補文	10.6	21.4	6.3	0.0	8.7	22.2	9.9	15.1	10.7
	- 0.2	+10.7	- 4.5	-10.7	- 2.0	+11.5	- 0.8	+ 4.4	
連体	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	11.1	0.5	0.9	0.8
	+ 0.2	- 0.8	- 0.8	- 0.8	- 0.8	+10.3	- 0.4	+ 0.1	
関係	21.3	21.4	18.8	0.0	13.0	11.1	20.8	18.9	19.7
	+ 1.6	+ 1.7	- 0.9	-19.7	- 6.6	- 8.6	+ 1.1	- 0.8	
副詞	10.7	7.1	12.5	0.0	7.8	11.1	10.4	8.5	10.0
	+ 0.8	- 2.8	+ 2.5	-10.0	- 2.2	+ 1.1	+ 0.4	- 1.5	•

後続する節種が前の節タイプと一致する率が特に平均よりも高いのが命令節・疑問節・連体節で、逆に一致率が目立って低い節種は発見されない。特定の節種を後続節とし易い傾向が認められるのは連体節→独立断定節、間接疑問節→独立断定節の連続である。また、特に後続節として平均よりも出現しにくいと考えられるのが、疑問節の後の独立断定節、間接疑問節・命令節の後の副詞節、連体節の後の補文節である。

表(6) Bでは間接疑問節が100%主節に先行されているのが目立つ。疑問節・命令節・連体節は前表(6) Aでの場合と同様、先行節とも一致する率が平均をかなり上回る。換言すれば、前接・後接いずれに対しても連続共起の確率が高いということである。一方、後続文としての出現率と先行文としてのその間に逆転が見られることもある。例えば、連体節(→独立断定節)は+11.9%であるが、(独立断定節→)連体節は-10.3%を示す。また疑問節に補文が後続する事例は平均以下の-3.6%であるが、補文が先行するケースは+10%である。

これらの数値から、資料体の各節を並列したと仮定する場合その継起出現には相当なバラツキが存在することが確認された。ただしこの変差が絶対頻度の小さい節タイプ〔単純では全体の1%前後しか占めない〕に関連したものに顕著であるところから、安定した特徴としてみなせるかどうかは疑問の余地を残すと思われる。

2. 副詞的修飾句

主語・直接目的語・間接目的語・述語補語以外の任意的文成分を副詞(的修飾)句と総称してきたが〔略号 AC〕、本節では文中での出現回数とその相対位置の関連性を明らかにする。

2. 1.

表（7）は副詞句を動詞に先行するもの A、と後行するもの B、に分け、 x 軸上に同一文中での AC として何番目であるかの値を、 y 軸上に同一文での語順要素としての順位をとって、全副詞句の生起についてそれぞれの頻度を集計したものである。

（7） A. 動詞前位

	1	2	3	4	計
1	271	0	0	0	271
2	53	25	0	0	78
3	0	8	3	0	11
4	0	2	0	0	2
5	0	0	0	1	1
計	324	95	3	1	363

B. 動詞後位

	1	2	3	4	5	6	計
1	0	0	0	0	0	0	0
2	65	0	0	0	0	0	65
3	152	44	7	0	0	0	196
4	121	111	34	0	0	0	239
5	14	65	19	2	0	0	115
6	1	10	5	3	0	0	33
7	0	0	0	6	1	0	12
8	0	0	0	0	2	0	2
9	0	0	0	0	1	0	1
計	353	230	65	11	4	0	663

C. 全体

	1	2	3	4	5	6	計
1	271	0	0	0	0	0	271
2	118	25	0	0	0	0	143
3	152	52	3	0	0	0	207
4	121	113	7	0	0	0	241
5	14	65	34	3	0	0	116
6	1	10	19	3	0	0	33
7	0	0	5	6	1	0	12
8	0	0	0	0	2	0	2
9	0	0	0	0	1	0	1
計	677	265	68	12	4	0	1026

副詞句が最も好む位置は文の冒頭位で、次いで才 3 番目の位置である。これは S—V, V—S, V—O の直後に AC の立つ例が多いのが原因と考えられる。文頭から数えて 7 番目以後に AC が初出する例は観察されなかった。最も後方に現われた AC としては才 9 位が 1 例記録されているが、これは文中に 5 個の副詞句が共起したケースの最後の AC である。

2. 2.

一つの文が含む副詞句の個数を調べてみると (8) のような結果が得られた。有副詞句文の合計 677 の中ではただ 1 つの AC を持つ文が過半を占め、AC の数の上昇と共に事例頻度が漸減するのが見られる。

(8)

副詞句の数	度数	累積延べ AC 数
φ	396	0
1	412	412
2	197	806
3	56	974
4	8	1,006
5	4	1,026
合計	1,073	

2. 3. 副詞句と語順パターン

1 文中に 2 度以上出現することのある副詞的修飾成分をすべて語順上の有効成分として数えた場合の各文型の頻度については前稿 (1983: § 3. 1, 1985b: § 1) で報告した。AC を除去した必須文法関係の結合順序のみに注目すると、語順パタンの種類は 4 分の 1 以下の 37 に激減する。この場合でも、最も多く観察されたタイプは S—V—DO で合計 203 例に達した。次表 (9) は AC を除く 5 要素でのタイプ頻度を任意的要素の AC が 1 つ以上生起する場合と、全くしない例を別々に計算し比較したものである。

(9) 基本要素語順パターン

タイプ	— AC	+ AC	計				
V	22	100	122	S-V-V	0	1	1
V-S	32	60	92	S-V-V-DO	0	2	2
V-S-DO	2	4	6	S-V-V-IO-DO	0	1	1
V-S-PC	1	1	2	S-PC-V	0	1	1
V-DO	50	71	121	DO-V	7	11	18
V-DO-S	3	3	6	DO-V-S	23	9	32
V-DO-IO	4	4	8	DO-V-S-IO	0	2	2
V-IO	2	2	4	DO-V-IO	1	1	2
V-IO-DO	1	0	1	DO-S-V	3	8	11
V-PC	28	16	44	DO-S-V-PC	1	1	2
V-PC-S	14	9	23	IO-V	0	3	3
V-PC-D	1	0	1	IO-V-S	3	1	4
S-V	33	139	172	IO-V-DO	2	0	2
S-V-DO	74	129	203	IO-V-PC-S	1	0	1
S-V-DO-IO	4	3	7	IO-S-V-DO	1	0	1
S-V-IO	4	4	8	PC-V	2	0	2
S-V-IO-DO	2	4	6	PC-V-S	3	1	4
S-V-PC	68	84	152	IO-S-V	1	1	2
S-V-PC-DO	3	1	4	合計	396	677	1,073

上表の集計値から χ^2 を求めると 114.32 になり、5 % の有意水準で副詞句の生起・不生起が語順タイプによって相違すると言える。語順の類型を群化して先頭素別に 5 パタンに集約すると (10) が得られる。

(10) 先頭要素別語順パタン

タイプ	- AC	+ AC	計
V —	160 (37.2%)	270 (62.8%)	430
S —	188 (33.8)	369 (66.2)	557
DO —	35 (52.2)	32 (47.8)	67
IO —	8 (61.5)	5 (38.5)	13
PC —	5 (83.3)	1 (16.7)	6
合 計	396 (36.9)	677 (63.1)	1,073 ($\chi^2=18.10$)

さらに配列パタンを主題化文（主語以外の成分が動詞前位を占める文）・非主題化文に大別して副詞句の有無を調べると (11) にまとめられる^{注1}。

(11)

タイプ	- AC	+ AC	計
主題化文	48 (55.2%)	39 (44.8%)	87
非主題化文	348 (35.3)	638 (64.7)	986
合 計	376 (36.9)	677 (63.1)	1,073 ($\chi^2=13.57$)

前表 (9) (10) で計算されるカイ自乗値はいずれも 5 % 水準で有意を示しているが、有標な主題化文に副詞的修飾語句が付随しにくいことが観察される。

次表 (12) は AC を除く文中語順要素数と AC の生起の関係を捉えようとするものである。2 個の V と IO, DO, S から成る使役構文のタイプである 5 要素文の特殊な 1 例を除くと、文の基本成分数が少なければ少ない程、副詞句が共起する割合が高い事実がわかる。

(12)

要素数	- AC	+ AC	計
1	22 (18.0%)	100 (82.0%)	122
2	154 (33.8)	302 (66.2)	456
3	208 (44.3)	261 (55.7)	469
4	12 (48.0)	13 (52.0)	25
5	0	1 (100.0)	1
合 計	396	677	1,073

3. 最頻無標文型

語順要素の並び方を基準とした文型の総種類115のうち最頻度を記録したのは S—V—DO タイプで74例であった (cf. 出口1983: § 3. 1)。主語—動詞—直接目的語がこの語順で現われる文タイプは要素数における最頻項である3要素文 (cf. 出口1985a: p. 12, 1985b: § 2. 3) の1つであると共に、順位を考慮しない含有語順要素別の種類の中でも最頻の組み合わせ [+ V, + S, + DO] に属することはわかっている (拙稿1983: p. 56)。言うまでもなく、SV 対VS, V—DO 対DO—V の頻度の比較からしても S—V, V—DO はより普通な配列であったし、また動詞の文中第2位は最も unmarked である (cf. 拙稿1983: pp. 57) 他、3要素文での DO の第3位もやはり最頻類型である (cf. 出口1985a: § 2. 8)。すなわち、S—V—DO 型の文はただこの語順が最も多く数えられたという意味以上に、さまざまな無標的性格を具現した^{注2}、典型的パターンとみなすことができよう。

このような主語・動詞・直接目的語の語順をもつ文のうち、他の諸尺度でも最も無標な文はどのようなものか、テキストから実例を捜し求めるために、本調査で考慮した関連の統語的条件の無標項を下記のように仮定することにした。

(13) 無標項の選定

1. 節種→独立断定節
2. 主語 NP の属性→定
3. 直接目的語 NP の属性→定
4. 助動詞の有無→無
5. 否定辞の有無→無
6. 付接辞の有無→無
7. 単文・複文→単文

さて、74例の S—V—DO 文のうちで独立断定文に相当するのは27例であるが、この中には否定文が6、動詞複合を含む文が3、付接辞文が4例数えられた。そのため、(13) 2. 3. の基準で無標とされる定主語・定直接目的語を伴う文は corpus に3例見出されるのみである。さらに、その文自体が単文であったのは1例で、他の2例は埋み込み文 (関係節) を内包する独立文と、並列的接続文の1部で、結局、上述の諸基準で最も無標と認められた実例は次の文 (14) ただ1例となった。

- (14) Y esa sangrienta gamberrada recibe el titulo de << lucha revolucionaria para la liberación nacional de Euzkadi sur >> ;

上文の動詞 recibir は動詞語彙項目としての頻度で見れば、他動詞の中で特に高頻度にランクされたものではないが (cf. 出口1983: p. 65)、出現度数が最大の tener, それに次ぐ decir, dar など を核動詞とし、かつ (13) の諸項目で無標に指定される文は発見されなかった。

4. 結論にかえて

スペイン語文法で展開される語順論や語順に関する数値的な分析は特に文構成要素レベルでの配列順序についてなされており、本稿もこの点では同じである。しかし、従来、関心の中心は特定2成分間の先後関係にあり、文形成に参与する全要素を視界に収めながらその背後にある統語的条件を含めて順序連関を多面的に同時に総合的にとらえ直そうとする試みがなされなかったように思われる。小論の調査はこの空隙をわずかなりとも埋めることができないだろうかという期待が動機となっている。

スペイン語に限らず語順の任意性のために我々はしばしば漠とした文法記述に甘んじなければならなくなる。「VS よりも SV が無標である」「AB よりも BA の方が頻繁に見られる」「XY なる語順は稀れである」… etc.の印象的認識は誤まりではない場合が多いであろう。無論、このような順序を実現する条件の厳密化を追求することがオ一の課題であろう。しかし、一方でただ単に「より多い」「普通」「稀」などの数的表現をもう少し正確にして、実際の文連鎖から裏付けされる量化として参照可能な資料の中に整え置くことも必要ではなかろうか。調査項目は粗く、資料体の規模もなお充分とは言えないのは事実で、選ばれるテキストの通層的、通話的性質に左右され、その数値はかなりな変異を見せるかも知れない。言うまでもなく統計結果から語順要素の配列を律する条件を推定したり原因を断定することは不可能であるが、若干の側面で語順の理論的仮説を補強し検証するためにこれらの具体的な数値の実体が有益になり得ると信じる。

(1985. 10. 1)

注

- 1) 前稿(1985a: § 2. 3)で検討した主題化は有主語文における主題化のケースであるため、(11)の87よりも小さい数値となっている。
- 2) DOが文中に含まれる文は含まれないタイプに比べれば有標であるが(41.6% vs 59.4%), これは自動詞の方が生起率が高いという意味ではない。本統計ではcliticはすべて独立の語順要素としては数えられていないからである。

References

- Deguchi, Atsumi (1983). Aspectos cuantitativos del orden de palabras en el español contemporáneo. — *Lingüística Hispánica* 6, pp. 55—66
- 出口厚実 (1985a), スペイン語における主語・動詞・目的語の語順に関する量的考察—— *Estudios Hispánicos* 10, pp. 1—17
- (1985b), 現代スペイン語における語順タイプの多様性とその頻度(1), ——大阪外国語大学学報 No.70-1, pp. 1—